

ヴァイオリニストTAIRIKの戯言

〔第80回〕

弦が揺れると、僕は季節の風になる

✦ 文 佐田大陸 text by Tairik Sada ✦

尊い人

自分は昔身体が弱く、アトピー性皮膚炎や3歳の時から小児喘息に悩まされてきました。かかりつけ医だった「諏訪豊田診療所」は、今は3代目の小松佳道先生が継いでいます。

進む高齢化と人口減少、深刻な医師不足が問題となっている地域医療にも意欲的に取り組まれています。月に一度の出張診療を行い、多くの患者さんが小松先生を心待ちにします。

「地区の方々」と信頼関係が大切。地元の人たちとの交流はなにごとにも代え難いから、できる限り大切にしていきたい」とサラッと云ってのける佳道先生は諏訪の宝です。

疾患は心の不安と直結します。近くに信頼できるお医者さんがいることがどれだけ心の支えになることか。

少年時代、手足に出ていたアトピーは活断層の断面のようにガサガサで、ちよつと激しく動くと思部の範囲が広がり、傷口が開き、血が流れました。指先にも広がっていたので、ヴァイオリンを弾く時には絆創膏を指に貼って練習していました。よく指の傷が弦と同じ角度になったために、すっぽりハマって痛い思いをしました。

喘息の記憶で思い出されるのは、ゼーゼーして呼吸できなくてつらかった物理的な苦しきよりも、せつかくり

レーの選手に選ばれたのに発作により運動会に出られなかったことや、「お前はきつと枕投げをしてみよう」と小学校最後の思い出に海の家へお泊まりするとう、心の底から楽しみにしていた行事を断念せざるを得なかった記憶の方が、まさに痛恨の極み。心に刻まれています。

2代目である小松道俊先生には、先生が亡くなるまでお世話になりました。

アトピーには塗り薬を、喘息には吸引薬、吸入、週に1度の注射など、病院との思い出が自分の少年期を象徴しています。

そんな折に垣間見えたのが、診療所に押しかけている人々への小松先生の視線の温かさ。具合が悪い人の心を気遣い、慮り、寄り添う。皆が先生を必要としていました。発作や注射によりテンションの下がりきった自分や、風邪でつらい思いをしている子どもたちには、診療後のご褒美でアメちゃんをプレゼントし、最後に必ず握手をしながら病気が治る魔法の言葉をかけてくれました。幼心ながら、とても安心したのを覚えています。

心遣いは道俊先生から佳道先生へ、ただ職業を継ぐだけでなく、心を継承していく奇跡。

自分の道に迷った時、良くないマイルドになりかけた時、何をすべきか途方に暮れたときに、いつも僕は2人の尊いドクターを思い出すのです。

profile

TAIRIK(たいりく) ヴァイオリニスト / ヴィオリスト / 作曲家

桐朋学園大学音楽部卒業、同大学院修了

ヴァイオリン & ピアノによる3人組インスト・ユニット「TSUKEMEN」を結成後、キングレコードよりメジャーデビュー。最新アルバム「HAPPY キッチン」など、リリースしたCDはクラシック・チャート1位を次々と獲得。国内にとどまらず、アメリカ、アジア、ヨーロッパなどで700本を超える舞台に立ち、50万人以上の観客を魅了。近年ではTSUKEMENに加え、古澤巖氏と結成した弦楽四重奏団「品川カルテット」、水谷晃氏と結成した「MIZUTANI × TAIRIK」も大反響を呼んでいる。

「徹子の部屋」「題名のない音楽会」「きょうの料理 栗原はるみのキッチン日和」など数多くのTV番組に出演。

SBCラジオ「TSUKEMEN TAIRIKの信 TAIRIK発見」毎週月曜 15:00台にレギュラー出演中。

<https://tsukemen-music.com>

